

わんにゃん通信

1月号
担当：田中

今回は犬のレプトスピラ症についてです。

レプトスピラ症とは

人にも動物にも同等に感染する人獣共通感染症（じんじゅうきょうつうかんせんしょう）の1つであり、感染症法では4類感染症に指定され、また家畜伝染病予防法では届出が義務化されている伝染病です。

分類	感染症の例
1類感染症	エボラ出血熱 ペスト ラッサ熱 等
2類感染症	結核 ジフテリア 重症急性呼吸器症候群（SARS）等
3類感染症	コレラ 麻疹（はしか）風疹 腸管出血性大腸菌感染症（O157） 等
4類感染症	マラリア 日本脳炎 狂犬病 レプトスピラ症 等
5類感染症	インフルエンザ 水ぼうそう 新型コロナウイルス感染症 等

原因は？

主に土と、媒介動物であるネズミの尿に接触することで感染します。皮膚の傷や粘膜から体内に侵入します。

レプトスピラに感染した犬に咬まれたり、レプトスピラに汚染された食べ物や水を摂取することでも感染します。

かかりやすさに犬種や年齢差、性差はありません。感染には飼育の環境が大きく関与します。

水が多い地域やネズミがいる場所での飼育環境、山や川で活発に動き回ることが好きな子は、感染してしまう機会が多くなります。

散歩中に過度にニオイ嗅ぎをしたり、舐めたりする癖がある子は注意が必要です。



症状は？

不顕性型

多くの犬は、感染しているにもかかわらず明らかな症状を示さないまま自然治癒します。また、猫に感染してもほとんど症状は出ませんが、排尿を通じて菌を環境中にばらまいてしまう危険性を有しています。

出血型

主症状は40℃前後の高熱・元気が無くなる・食欲不振・結膜の充血・嘔吐・血便・血尿・鼻血・吐血・尿のにおいが強くなる・黄疸（白目部分、口の粘膜、おなかの皮膚が黄色く変色すること）などです。

黄疸型

黄疸出血レプトスピラ菌によって引き起こされる症状です。人間で発症した場合は「ワイル病」とも呼ばれます。

主症状は突然の高熱・食事を受け付けない・全身の震え・嘔吐・口内粘膜や歯茎からの出血・結膜の充血・黄疸（白目部分、口の粘膜、おなかの皮膚が黄色く変色すること、約70%の割合）などです。

診断

細菌を検出するために、顕微鏡法・培養法を用いたり、血液検査・遺伝子診断法・血清学的診断法などを行います。

遺伝子検査法（PCR法）

近年一般的になってきた、尿や血液からレプトスピラの遺伝子を検出する検査です。



抗体検査

発症後、初期と比較して8～10日間くらいで上昇する血液中の抗体の量を測定します。

尿検査

顕微鏡で感染したレプトスピラ菌を検出します。
発症後14日目くらいから確認ができます。



画像診断

レントゲン検査、エコー検査で腎臓や肝臓の形や大きさを確認します。

レプトスピラ症は体内に感染した菌を見つけるのが難しく、なかなか診断がつかない病気です。

治療

抗菌薬を投与

体内のレプトスピラ菌を消失させます。
キャリアになることを防ぐためにも、回復後も徹底的に抗菌薬を投与します。
排尿時にまきちらさないよう、腎臓から細菌を完全に除去していきます。

腎障害、肝障害への対処療法

脱水症状があれば点滴をします。
肝臓障害、腎臓障害があればビタミンB、強肝剤、利尿剤の投与をします。

倉重獣医師のコラム



レプトスピラは他の犬と接触しなくても、水や土壌を介してネズミの尿から感染します。一応ワクチンもありますが、血清型が複数あることや免疫がしっかり持続しない場合もあり、確実な予防法ではありません。発症して尿が出ない状態に陥ると高確率で死亡する疾患なので、ワクチンで防御力を高めるとともに、むやみに草むらに入らない、外のたまり水を飲ませないなどの対策をして、少しでも感染のリスクを下げましょう。

